



◀ 鶏舎の周囲には、石灰が散布されるなど、消毒に余念がない。



▶ 鶏は、ひよこから50日育て、食肉用として出荷する。



臭い対策に取り組んだ4年間 地域との対話の大切さに気づく

養 鶏の朝は早い。朝6時に餌を与え、鶏の観察のため鶏舎内を見て回る。鶏は温度に敏感だ。特に夏場は神経をとがらせる。鶏の様子を見ながら、霧を吹きかけ、扇風機の角度を調節。また、調子の悪そうな鶏には薬を与えるなど、3万羽全てに気を配る。「相手は生き物。一羽一羽その日によって違いますから」と話す大畑さんの言葉には重みがある。養鶏を始めて5年ほど経った時、鶏が多量に死ぬことがあった。原因が分からない。考えられる事は全てやったが、多くの犠牲を払った。検査の結果、細菌性であることが分かり、消毒の大切さが痛感。それ以後、通常の消毒のほかに、鶏舎に入る時は、専用の雨靴に履き替えるほど徹底している。

そんな養鶏業が必ず抱える、ある課題がある。それは臭い対策だ。大畑さんも様々な試みを行ってきた。しかし、なかなか成果が表れない。周辺には住宅があるため、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。そんな時、先輩の助言から、餌に配合する飼料に着目した。餌に混ぜて食べさせながら、臭いの原因となるアンモニア濃度を測り、毎週記録。様々な資材を4年間試した。結果、アンモニア濃度は減少。一定の効果を得られた。しかし、完全に臭いがなくなった訳ではない。そこで、周辺住民の声をヒントに、臭いが強くなる時期には周知する手作りのチラシを配布し説明した。すると、予想以上にいい反応が。地域との対話の大切さを改めて知った。



▲シートにはアンモニア濃度のほか鶏の体重まで記録してある。



▲アンモニアを検知すると、検知管が紫色に変わる。



▲鶏舎内3カ所で毎週欠かさずアンモニア濃度を測る。



▲アンモニア濃度を測る検知器。

養鶏農家・小林市SAP会議 おおはた しょういち 大畑 正一さん

Oohata Syouiti (野尻町・東麓)

昭和56年生まれ。30歳。養鶏を営む両親を21歳から手伝いはじめ、現在では1人で3万羽の鶏舎を管理する。小林市SAP会議に所属。3月に行われた宮崎県SAP冬期大会では、「ブロイラーの臭い対策～4年目の結論」と題した取り組みを発表し、最優秀賞を受賞。7月21日から開催される九州大会に出場する。

